

目 次

| | |
|------------------------------|-----|
| 巻頭文 福のり子 | 3 |
| I. 基礎プロジェクト | 10 |
| 鑑賞者ボランティアの構成 | 10 |
| 各グループ鑑賞作品の紹介 | 11 |
| アメリカ・アレナスによる鑑賞者分析 | 21 |
| 甲南大学による鑑賞者研究プロジェクト参与観察 | 31 |
| メンター・レポート | 42 |
| 鑑賞者ボランティア参加者によるエッセイ | 45 |
| 学生アンケート集計 | 49 |
| 学生レポート抜粋 | 57 |
| 学生レポート全回答 | 66 |
| II. 実践プロジェクト | 153 |
| 美術館編 | 153 |
| FORCE of NATURE –自然の力／アートのカー | |
| アートフェスタ in 大山崎町 2007 | |
| 静岡県立美術館ワークショップ | |
| 知的ワンダーランドとしてのミュージアム | |
| ボーダレス・アートミュージアム NO-MA | |
| 学校編 | 167 |
| 宝塚市立中山五月台小学校 | |
| 京都府立西宇治高等学校 | |
| 島根県教育委員会研修 | |
| III. ACOP 関連取材記事 | 169 |

巻頭文

福 のり子

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

(1) はじめに

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科(ASP)では、2004年度から「ACOP」と名付けた鑑賞教育プログラムを行っている¹。ACOPではグループで作品をみながら、それぞれが思ったことや感じたこと、あるいは疑問点などを話し合っていくという、対話を基本とした作品鑑賞を提唱している。「アートは難しい、わからない」と敬遠している多くの鑑賞者(とくに鑑賞の初心者たち)にとって、知識だけに頼らない、コミュニケーションを基本とした作品鑑賞はひとつの有効な方法であるという前提に立って始められたプログラムである。

ACOPは、京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科で私が担当する通年必修科目「芸術表現演習」を履修する1回生と編入3回生を対象とした「基礎篇」と、そこで学んだことを基本に、2回生以上の学生が学内外でのプロジェクトを行う「実践篇」の2つの活動から成り立っている。これはその報告書である。

(2) 基礎篇

<目的>

(中略。詳しくは本書参照。)

<活動経過>

(中略。詳しくは本書参照。)

<鑑賞会実施日&参加者数>

(中略。詳しくは本書参照。)

(3) 実践篇

(中略。詳しくは本書参照。)

(4) 調査と分析

美術作品を鑑賞するとき、特に、対話を基本としたグループ鑑賞の場合、鑑賞者の頭と心の中でいったいなにが起きているのだろうか?あるいは、そういった鑑賞方法を何度か経験することで、鑑賞後の彼らにどのような変化が起こるのだろうか?それらを追跡調査し分析するのは、たやすいこと

¹ ACOPは「Art Communication Project」の略で「エイコップ」と発音する。

ではない。さらに、ナビゲーターを経験した学生にはどのような意識が芽生えるのか？ 統計学の専門家でも心理学の専門家でもない私は、いつもこの「分析」の段階でとまどってしまう。

しかし、確かに何かの「気配」は、そこにある。1年間この授業を受けている学生はもちろんのこと、ボランティアでたった3回しかACOPを体験しない鑑賞者ボランティアの方々も「自分は変わった」と気づくほどに変化しているのだ。個々の学生とアートの関係にみる変化は、「学年末レポート」の問い（とくに質問1-1）をみればよくわかる。

では、なぜそうした変化が起こるのだろうか？あるいは、アートとの関係性以外に、どのような変化が起きているのだろうか？そのことを知りたくて、毎年様々な分野の専門家にACOPの分析をお願いしている。

2006年度は京都大学大学院情報学研究科に依頼して、鑑賞者ボランティアの方々について分析をしていただいた。同時に、ACOP立ち上げ時からのアドバイザーであるアメリカ・アレナスにも彼らの変化を分析してもらった。

今年度は、調査の対象を学生に絞って2種類の調査・分析を行った。

最初の調査は、新学期初回の授業時に行った。ピカソの描いた自画像が印刷された紙を各学生に配布し、「それをみて心に浮かんだこと、疑問でも想像でもなんでもいので、配布した用紙に記入。時間は20分間。もし途中で書くことがなくなったらやめてもいい」という指示を出し、無地のA4用紙に自由記述させる。さらに学年末、すべてのACOPの授業が終了した時点で、ピカソの別の自画像をみせて、まったく同条件での調査を行う。

4月から翌年の1月、つまりACOPを経験した9か月間に、「作品をみる」ことにおいて学生がどのように変化したかを知るためである。2種類のピカソの作品をみて学生が書いたものは英訳し、アレナスにその分析を依頼した²。

さらに、学生を主眼に置いた分析をもうひとつ行った。その労を引き受けてくださったのは、甲南大学人文科学研究科の羽下大信教授のゼミ生、伊達隆洋氏と荻野基介氏である。両氏は羽下教授のもとで心理学を学ぶ大学院生だ。2人は6月から週1度、ACOPの授業のほぼすべてに参加し、後期には正規の授業だけではなく、学生が行う何百時間にも及ぶ自主練習の多くに週末も昼夜もかまわず参加してくださった。学生たちは、教師である私には話しにくいような事柄を彼らには話し、相談していたようだ。伊達、荻野両氏の「報告」は31ページに掲載している。これらの報告は、私が「気配」などという曖昧な言葉で表現したものの一部に光をあて、その姿を浮かび上がらせてくださった。

興味深いエピソードをひとつ紹介しよう。当初は、「観察者」としてACOPに参加していた両氏が、ある日、ナビゲーター・デビューを果たすことになった。より積極的な観察者であるためにも、一度自らがナビゲーションを行って、学生たちの気持ちも味わってみようという思いが彼らのなかにあったのだろう。同時に、学生たちのなかには、「ナビをやっていない人には、この大変さはわかんないんじゃないか」というような疑問が生まれていたようにも感じる。

ある日、ひとりの学生が伊達氏に「《カラカラ帝》³の作品でナビをやってみてください」と、自分がナビゲーションの練習をしていた作品を差し出して要望した。伊達氏は美術の授業は好きではなく、それまでに2回しか美術館に行ったことのない人である。その学生の挑戦を受けて、一瞬とまどったような表情をみせたが、意を決して引き受けた。

伊達氏のナビゲーションが終わった後、大きな拍手が起こった。学生のひとは私に「鳥肌が立った」と言い、別の学生は「悔しい」と言いに来た。他の学生グループにもその噂は伝わり、「私たちの前でもぜひナビをしてください」という声があがったほどだ。

「美術の素人である彼のナビゲーションが、なぜ成功したのだろうか？」と、その後、学生たちは考

² 同様の調査は昨年度も行っている。ただし、調査対象は今年度とは異なり鑑賞者ボランティアの方々（17歳から80歳）であり、彼らは学生がナビゲーションを行う鑑賞会に鑑賞者として3回だけ参加してくださった。今年の被験者である学生がみせた「変化」との比較など、本報告書にはアレナス氏による興味深い分析も掲載している（P.21）。

えてくれたようである。

伊達氏がしたことは、ひとり一人の言葉をきちんと拾うこと、つまりよい聞き役になること、鑑賞者に安心感を与えて、自由な発言の場を約束すること、そして「なぜ、そう思ったの？」と、鑑賞者が再度作品について考えられるようなちょっとした挑戦も忘れなかった。さらに、ある学生がとてもおもしろい意見を言ったときには、ナビゲイターも心から感動し、自分が理解できないときには正直にそれを言い、みんなで一緒に考えるという雰囲気をつくったことだ。つまり、コミュニケーションを常に閉じさせない工夫をしたのである。さすがに心理学を専攻している学生である。

しかしもうひとつ大切なことがある。それは、伊達氏は自らがナビゲイションを行うまでに、学生たちの練習に付き合い、それまではほとんどみたことのなかった美術作品をじっくりとみるという経験を積んだことである。その経験を通して、それまでは「オフ」になっていたと思われる彼のアートへのアンテナを「オン」にし、作品から発せられる様々なメッセージをキャッチし始めたのだ。感度の良い鑑賞者になるということは、とりもなおさず感度の良いナビゲイターになれるということなのだ。学生の「学年末レポート」をみてもわかるように、学生たちも徐々にそのことに気づいていくてくれている。

(5) 週間報告

後期に入ると、学生たちは膨大な時間の自主練習を行う。私もできる限り彼らの練習には付き合うが、すべての学生の状況はなかなか把握できない。そこで、毎週すべての学生から、その週に思ったこと、感じたこと、困ったことなどを短くてもいいので文章にしてもらい、メールで提出させている。これを私たちは「週間報告」と呼んでいる。これは「学年末レポート」のように公表することを念頭においては書かれていない。しかし、各自の悩み、そして成長の興味深い記録であるので、個人を特定しないよう配慮しつつ、ここでは少しだけそれに触れながら彼らの足跡をみてみたい。

(中略。詳しくは本書参照。)

(6) 最後に

ACOPに取り組み始めて4年が経った。つまり、このプログラムをはじめたときに入学した学生たちが、今年卒業したのである。美術館に勤務が決まった学生、教師になった者、あるいは大学院に進んだり、海外留学をした学生もいる。たとえ直接アートにかかわる仕事に就かなくとも、全員が「過酷だ」と声を揃えるこの必修の授業から、生きるための何かを身につけてくれたのではないだろうか。せめて、これらが心に残る、あるいは琴線に触れる経験でなければ、彼らの苦悩も報われない。これは、決して平坦ではない「場」の設定をしながら、もがき苦しんでいる学生を見守ることしかできない私の、希望的観測である。

それにしても、学生たちから、私はたくさん学びと喜びをもらった。

学生が「ACOP 症候群⁴」に陥ったということを知ったときは、とても嬉しかったし、「以前より、小さなことにも感動できるようになった気がする。それは、小さなことも見落とさないようになったせいかもしれない」という言葉を聞いたときには、思わず自分を顧みた。「こんなに人間と関わり、自分と向き合ったことは初めてで、このACOPでようやく私は自分自身を自育することができ始めまし

³ 作者不明の、紀元 200 年ごろの彫像。

⁴ ACOP を体験した学生たちが、授業中や作品鑑賞のときだけではなく、日常生活でもこれまで当たり前だと思ってきたことに対して「立ち止まって考える」ようになることをこう呼んでいる。例えば「なぜ、赤信号は止まれを意味するのか？」など。

た」という文章を読んだときには、これは私自身のことでもあるとうなずいた。

教える人と教わる人との立場は、つねに流動的だ。それはコミュニケーションにおいて、受け手と発信者の立場が常に交互に自分に廻ってくるように。

京都造形芸術大学芸術表現・アートプロデュース学科

福 のり子

2008年4月

追記

最後になりましたが、学生たちが壁にぶち当たりながらも、少しずつ成長していったのは、ボランティアの鑑賞者としてお忙しい中、はるばる京都の北の端まで何度も起こしいただいた皆様のおかげです。「他者と接すること、共有することをしないと、人は存在できないということだ」と、ある学生は「週間報告」に書いています。「お客様」という他者がいてくださったからこそ、彼らは自らの存在を確認できたのだと思います。深くお礼申し上げます。コミュニケーションに終わりがないように、ACOPも続いて行きます。どうかこれからもACOPにご協力いただけますよう、よろしく願いいたします。

(以下、省略。詳しくは本書参照。)